

【59th ASH annual meeting 参加報告】

京都大学ウイルス・再生医科学研究所 ウイルス制御分野
豊田康祐

この度は 59th ASH annual meeting に参加するにあたり、JALSG Young Investigator ASH Travel Award 2017 に採択いただき、誠に有難うございました。また今回開催地であった Atlanta が近年稀に見る大寒波に襲われたため、実際の学会参加が 2 日目の 12 月 10 日からとなってしまいましたこと、この場をお借りして深くお詫び申し上げます。

さて今回の ASH annual meeting も新規性に富む魅力的な演題ばかりであり、参加して良かったと心から思える充実した学会となりました。

中でも、*TP53* 変異を有する患者検体を用いた研究で、造血幹細胞では PD-L1 の発現が亢進し、immunosuppressive な population として知られる ICOS high / PD-1 low の Treg が増加していたとする報告(# 423)や、喫煙の intensity や duration と MDS に関連する遺伝子変異の頻度とを比較検討した Cleveland Clinic からの報告(# 424)など、大変興味を持って拝聴することができました。その他、約 52 万人の健常人コホート (EPIC) を使用した研究では、登録後に FL を発症した患者の pre-diagnostic PBMC を CAPP-seq を用いて解析、*CREBBP* を含む複数の遺伝子変異の検出が報告されていました(# 308)。

最終日の late-breaking abstracts では、HOVON 及び SAKK から、初発 AML における寛解導入療法後 1st CR 例での MRD に関する解析結果(N = 430)が報告されていました(# LBA-5)。同研究内では遺伝子パネル(遺伝子数 = 52)を用いた targeted sequence が行われており、初発時に変異が検出された遺伝子のうち、1st CR でもその 50% に変異が継続して認められました。これまで顕微鏡下で確認してきた 1st CR の AML が、いかに再発のリスクを孕んでいるのか、改めて痛感することができました。また 1st CR の時点で変異を認めた遺伝子のうち、*DNMT3A* や *TET2*、*ASXL1* などいわゆる CHIP に関連する epigenetic な遺伝子が高頻度に認められたことも大変興味深かったです。

学会 3 日目には、JALSG の諸先生方に昼食会を開催していただきました。その席では大野竜三先生より、「本 Award は日本の若手血液内科医に世界を肌で感じてもらうため、信念を持って続けている」というお話を頂戴しました。心から感謝の念を抱くとともに、今回の経験を基に日々精進していきたいと改めて身が引き締まった次第です。

最後になりましたが、ASH annual meeting への参加という貴重な機会を提供していただきました、JALSG の諸先生方ならびに事務局の皆様に心より御礼申し上げます。本当に有難うございました。